

経験を文章にしよう

拓殖大学 顧問 渡辺 利夫



作文部門で大賞を授けられ

ましたのは、早稲田大学4年生、葉山瑤さんの「青緑の双眸の向こうに」です。一読、この作文の文章レベルは相当に高い

と私は直感しました。短いエッセイの中で、瑤さんは台湾に対する思いをふくよかに詠いあげています。

瑤さんのお母さんは台湾人です。そのお母さんのお母さん、つまりは瑤さんのおばあさんの瑤さんに対する愛情を描いて、瑤さんは自分のルーツが台湾にあることに何か誇らしきものを感じ取っています。この感覚が文章の中にみずみずしく表現されていて心打つも

のがあります。

スピーチ部門で大賞となりましたのは、佐賀大学3年生の山内佳祐さんの「日本と台湾の架け橋として」です。佳祐さんは15年間を台湾で過ごし、義務教育を台中市の日本人学校で受けたという経験の持ち主です。佳祐さんは情に

厚く、人を思う気持ちの強い親日的な台湾人に囲まれて幸せな生活を送ったようです。そして「日本文化も台湾文化も全て私の一部です」と語り、また「私の生活はどちらかの文化が欠けていてもあり得ない生活でした」と述べています。このことを流暢な中国語で語り、

また審査員の質問にも明晰に答えていた佳祐さんの笑顔が今も印象に残っています。

皆さんは家庭、学校、海外研修、地域社会、その他いろんな場でさまざまな経験を積んでこられましたよね。しかしこれらの経験も、これを言語化（つまり文章化したりスピーチにしたりすること）をしませんと、それらはいつの間にや

人生のささやかな経験としてほとんどが忘れ去られていきます。

経験はこれを言語化することによって初めて「経験知」となり、これが一つの確かな経験知

のブロックとなりま

す。別の経験を言語化しても一つの経験知のブロックができあがっていきます。いくつもの経験知のブロックを積み上げていきますと、簡単には崩れない経験知の大きな塊となります。この塊こそが人間として成長したことの何よりの証

なのです。作文やスピーチをさらに磨きあげていって欲しいものです。

第18回日台文化交流 青少年スカラシップ

